

『私の出逢った教師たち その一』

先日、ある教育雑誌から教職の魅力について文をかいてほしいとの依頼がありました。自分の歩んできた道について振り返ってみました。ふと時間が経ってみて、私が出逢った教師の姿をかけば良かったと思えました。そこで今回と次回の教育長メッセージでは、私がお世話になり今でも尊敬している先達たちについてかき、教職の魅力について考えてみることにします。実名を避け、A B C D先生と書かせていただきます。

大学の恩師であり、私の仲人を務めてくださったA先生。専門が教育方法学（社会科教育）。先生の講義は大学4年生の時に受けました。私は卒業論文で「民主主義を社会科でどう教えるか」というテーマに取り組んでいました。先生の講義が終わるたびに、疑問に思った事や自分の意見を先生にぶつけました。先生もまだ50代にさしかかった頃で若かったこともあり、真剣に私の疑問に答えて下さいました。学ぶということ、問題意識をもって追究するということの大切さを教えていただきました。その後、私は小学校の教師として着任しました。A先生に誘われ、若手教育者研究会という会のメンバーとなり、月に一度名古屋大学の教育学演習室へ通うことになりました。先生の紹介で社会科の全国組織の研究会のメンバーにもなり、著名な教育実践家の先生を訪ね、学級経営や授業づくりのお話を聞くことができました。さらにA先生には私が勤務した小学校の現職教育の講師として年に二回～三回来て頂き、授業づくりや授業研究の指導を受けました。A先生が母校を退官される時には、退官記念の書籍を皆で作成しました。当時中学校に勤めていた私は「明眼院一日本最古の眼科治療所」の報告をしました。大治町にある寺院まで足を運んでいただきました。先生には褒められたことより、厳しく諭されたことが記憶に残っています。今も二月になると先生を偲ぶ会を続けています。

B先生とお会いしたのは私が教職について五年目の春。私の学校の校務主任として赴任されました。兎に角、スケールの大きな親分肌の先生でした。転勤してみえて一番初めに仰ったのは「日曜に入学式の入場門をつくるから朝一番で来るように」ということでした。不器用な私は、ただ器用な先生のお手伝いをしただけでしたが、先生といると学校の仕事というのは分担された仕事の隙間を埋めることが大切だとわかるようになりました。校務分掌にあらわれない仕事を進んで行く、教師としてのあるべき姿を教えられました。B先生は私たち若手（当時は若かったのです）の面倒をよく見て下さり、夜釣りやボーリング、ゴルフ（私は途中で断念しましたが…）、様々な飲み会に連れて行って下さいました。そのような折りに人と出逢うことの大切さも教えていただいたように思います。私のような者がその後に管理職の道を歩むことになったのも、B先生と出逢い、B先生に憧れたからだと思います。キャンプの下見に行った夜、バンガローで相撲を取ったことも思い出に残っています。

令和8年2月2日

津島市教育長 浅井厚視